石巻専修大学
●「石巻専修大学」ホームページ● https://www.senshu-u.ac.jp/ishinomaki/

石巻専修大学
広報係
〒986-8580
宮城県石巻市
南境新水戸1番地
☎0225-22-7717（直）

最新の情報は大学HPで。

後期授業スタート

感染症対策ガイドラインを策定

3Dプリンターで製作したフェースシールドをつけて機械工学の実習に取り組む学生＝10月7日

実験・実習は対面形式

石巻専修大学の後期授業が9月23日から始まった。

これに先立ち本学では「後期授業の運営ガイドライン」を策定。ガイドラインには手洗いや手指消毒、マスク着用、換気などの基本的な感染症対策に加え、「3つの密」を避け、「新しい生活様式」を教育研究活動に取り入れることなどを盛り込んだ。後期授業はこのガイドラインに基づき、非対面授業を継続しながら、実験・実習系の科目や大学施設を使わないと実施できない科目などで対面授業を行っていく。現在、対面授業を行っている科目は全体の半数を超える。

三森敏正教授のゼミに出席した森泰喜さん（経営2・宮城県美田園高）は、今年度初となった対面授業を振り返り、「今年から始まるゼミを楽しみにしていた。前期はすべてオンラインだったので、ようやくゼミ生と顔を合わせることができてうれしい。人と触れ合うことの大切さを改めて実感した」と話した。

学内3Dプリンターでフェースシールド製作

一部の実験・実習では、大学の3Dプリンターで製作したフェースシールドを着用し、感染予防の徹底を図っている。

フェースシールドの製作は、理工学部機械工学科の高橋智准教授が中心となって進めた。対面授業の再開を見据えて5月から検討を開始し、約1カ月で120個を製作。教員、学生に配布され、現在は工作実習や機械工学実験、自動車関連の実習などで使用している。

設計もオリジナルで、眼鏡着用者の使用も考慮したほか、シールドが曇らないようにしたり、名前カードを差し込む部分をつくって個人管理ができるようにしたりするなど、随所に工夫を凝らした。組み立てには機械工学科の学生も参加した。

高橋准教授は「このフェースシールドが感染症対策の一助になれば幸い。『新しい生活様式』のもと大学生活を快適に過ごせるよう、今後も機械工学科の技術を提供していきたい」と話した。

渡波海岸の生物について角田出教授（右）の説明を聞く学生たち（海洋実習）

生物科学科　待望の野外実習

オンライン授業が続くなか、1年次生にとって待望の実習が8月下旬に実施された。石巻の自然豊かなフィールドで行われた実習には、理工学部生物科学科の1年次生69人が参加。これまでに机上で学んだ知識を、実地で体感する貴重な機会となった。

生物科学科には「海洋生物」「動物」「植物」の3コースがあり、各分野の実習が実施された。

8月22日に行われた海洋実習では、大学近郊の渡波海岸で潮間帯における生物の分布を調査。胴長を着て海に入り、海洋生物の採取にも挑戦した。26日の動物実習では、水田などからサンプルを集め、顕微鏡を使ってミジンコや繊毛虫の観察を行った。28日には大学の演習林にもなっているトヤケ森山で植物実習を実施。植物を採取し、実験室で葉脈や気孔を観察した。3日間の実習を通じて学生たちは、初めて顔を合わせた同級生や教員との会話を楽しみながら生物科学への興味を深めた。

同学科では、7月から9月にかけて、2、3年次生を対象とした実習も実施。学生たちは、豊富な実習を通して、専門性を高めている。

農業用水路からサンプルを採取（動物実習）

3氏に名誉教授称号記

石巻専修大学名誉教授称号記授与式が9月8日に行われ、芳賀信幸元理工学部教授、山本憲一元理工学部教授、吉原章元理工学部教授に名誉教授称号記が授与された。

称号記を授与された山本元教授、吉原元教授、芳賀元教授（右から）

授与式で尾池守学長は、3氏の本学への多大なる貢献に対して感謝の言葉を述べた。

今回の授与によって、本学の名誉教授称号記授与者は29人となった。

3年連続5回目 杜の都駅伝出場

第38回全日本大学女子駅伝対校選手権大会（杜の都駅伝＝10月25日、宮城県仙台市）の東北地区代表選考会が9月28日、岩手県北上市総合運動公園で行われた。女子競走部が1時間55分9秒で総合2位となり、3年連続5回目となる杜の都駅伝出場を決めた。

区間賞を獲得した齋藤さん（右）

代表選考会は駅伝方式で行われ、3人1組、2チームの合計タイムで順位を競う。

本学からはAチームに齋藤凜さん（経営2・宮城県聖和学園高）、フォックス真島新菜さん（経営1・青森県八戸学院光星高）、千葉彩有花さん（人間3・宮城県常盤木学園高）、Bチームに佐藤亜海さん（経営2・宮城県聖和学園高）、長谷川日菜さん（人間1・青森県弘前学院聖愛高）、樋口亜沙美主将（経営4・山形県山形城北高）がエントリーした（出走順）。

齋藤さんは、1区で2年連続となる区間賞を獲得した。樋口主将は「ベストな状態で本選を迎えられるように調整し、応援してくれている皆さんに良い走りを見せたい」と話した。

訂正　9月号7面「南東北大学野球秋季リーグ戦」の記事で「渋谷俊哉さん（経営3・青森県青森山田高）」とあるのは、「渋谷祐太郎さん（経営2・宮城県築館高）」の誤りでした。おわびして訂正します。

研究室探訪

現実と文学の関わりを考える

人間学部人間文化学科　遠藤　郁子教授
ENDO IKUKO

研究の入り口は、大正から昭和にかけて幅広い分野で活躍した佐藤春夫の文学です。現実に対する批評精神と実験性に富む多彩な創作物は、多面体としての人間の複雑さと、そこから見いだすことができる可能性を体現しています。

私たちは現実の中で揺れながら、さまざまに分裂した自己を抱えて生きています。そうした多面性は現実の中で生きる術として重要であり、揺れ続けることにこそ現実変革につながる可能性も見いだせると考えています。

そして、現実の中で揺れ続ける文学表現への関心の延長線上には、現在進行形の〈今〉を強く反映した現代文学への関心があります。2011年に起きた東日本大震災と福島原発の事故と同様に、20年のコロナ禍もまた日本社会のあり方を大きく変えつつあります。こうした現実の変化と日本文学はどう向き合っていけるのかが、現在の私の重要な研究テーマのひとつです。

文学は虚構であり、現実をそのまま映す鏡ではないからこそ、現実の拘束を離れてその深層に迫り、別の現実の可能性を開く鍵を見いだせるのではないでしょうか。そしてその鍵を手に入れることで、私たちはより自由に柔軟に今を生きることができるのだと思います。今後も日本文学がどのように現実と切り結ぶことができるかを見据えながら研究を続け、豊かな文学の世界を学生の皆さんと共有したいと考えています。